

「飛行機を飛ばそう」から

怪獣との戦いが始まった

阿部 康子

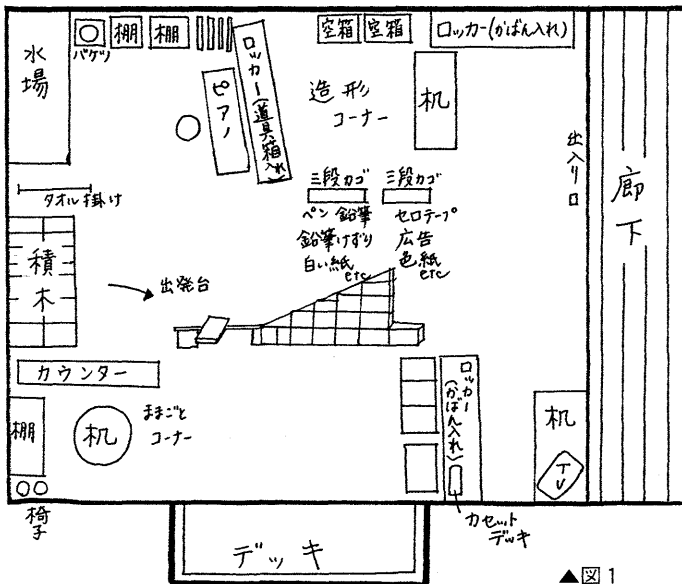
四月、満開の桜のもとで新学期が始まった。男児十二名、女児十二名の子どもの出会いである。クラス替えがないので、子どもたちは新しい環境での生活にも大きな不安はなく、むしろ新しい生活への好奇心と期待、新鮮さが、年長組になった！ 大きい組になった！ という喜びに重なって、始業式当日から生き生きとした生活が展開された。子どもたちの、特に

男の子にとって年長組になってやりたいことの一つは、年中組の時からのおこがれであった、自由に自転車に乗って思い切り園庭を走ることの実現であった。登園活動をすませると、保育者へ「自転車へ行ってきたあす」と声をかけ、園庭へ駆け出し、お気に入りの自転車に乗って思いのままに走らせて遊ぶ、があり、十台の自転車は連日フル活動である。身体のバランス

のとおり方、ブレーキの操作、走る速度の調節など、保育者の指導を受けながら交替し合って嬉しい毎日が続いた。

見ていると、子どもたちの一日の始まりは、登園後、まず自転車に乗って思い切り走る、鉄棒や雲梯などで自分の得意技を披露したり、おしゃべりをし合っ

てしばらく時を過ごす、そして保育室へ戻ってくる。保育室では、造形コーナーで作ったり描いたりが始まる。材料のストローを一センチメートル程の長さに切つて糸を通し、ネックレスにする、紙を細く細く巻いたものをストローに入れて口で吹き、吹矢にして戦いごっこに使う、広告紙を巻き上げたものを幾本もつなぎ合わせて天井へ届かせて面白がる、絵本をデッキに並べて「本屋さんの開店」、ままごとコーナーではチュールの冠を被つて雪の精ごっこやピクニックごっこが度々登場する、音楽会をやるうと、積み木でステージを組み、楽器を持つて集まる等と、毎日多様な遊びが始まり、どの遊びでも子どもたちはよく喋り、



▲図1

笑い合い、楽しさ一杯である。けれども、どの遊びも計画して準備を楽しんでの段階で終わってしまう。例えば「ピクニックごっこ」でいえば、ピクニックに行こう、と仲良し二人で相談がまとまる↓「お弁当がいるワ」とままごと用具からハンバーガー、おにぎり、卵焼き、パン、敷き物、お皿にコップ、とりつくサツクに詰め込んで出掛ける↓保育者が「行ってらっしゃい」と声を掛けると、二人の子どもは「行ってきまあす」とままごとコーナーを後にする↓けれども保育室を一回り、ままごとコーナーへ戻ってお弁当を広げ、食べて終わりである。お化け屋敷も、積み木を積んで暗くする、本屋さんも、デッキに絵本を並べる、で終わりである。故にどの遊びも時間は二十分位で終わり、他の遊びへと移っていく。楽しげではあるけれど、本当に遊びこめているのだろうか？ と気になり始めた(図1参照)。

一方ではまだ四月ではないか、前年度の姿が大きく残っていて当然なのだから、じっくり見守るべきでは

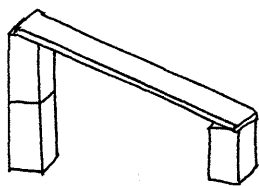
ないか、けれど五歳児としての生活は出発しているのだから……環境は、援助は……と、悩んで過ごすうちに五月を迎えた。

五月十一日(木)の朝「飛行機を飛ばそう」から怪獣との戦いが始まった。

牛乳パック飛行機の出発台を作る

登園したたつまとたかゆきが、お帳面にシールを貼りおえると、「飛行機の出発台を作ろう」とたつまが言い出し、たかゆきと二人で、積み木コーナーで積み木を組み始めた。保育者が「自転車には行かないの」と声を掛けると「ウン、行かん。後から行くかもしれんけどね」とたかゆきが答え、二人は出発台を作り続ける。保育者は

どんな出発台になるのか、飛行機というのは、昨日牛乳パックを幾つも組み合わせて作って



▲図2

た、今ロッカーに置いてある飛行機かな、でも牛乳パックを四個も五個も貼り合わせたものをどうやって飛ばすのかな、と思ひ巡らせていると、「できた！」とたかゆき。出発台はごく簡単なもので、一方を高くとたかゆき。出発台はごく簡単なもので、一方を高く積み、板を渡しただけのものであった（図2参照）。

保育者はどうやって出発させるのかな、と見ていると、たかゆきが「新型のがあるわ」と造形コーナーへ戻り、牛乳パックを材料箱から出して作り始めた。たつまも「僕も作る」とたかゆきに並んで作り始めた。保育者が「昨日作ったあの飛行機は使わないの？」とロッカーの上の飛行機を指して声を掛けると、「あれとちがうやつ」と言つて二人はせつせと作つている。

りょうたが怪獣を作る

たつま、たかゆきと一緒に登園したりりょうたは、造形コーナーで何かを作っている。

今日は、乳酸飲料の容器を幾つも並べ、「僕は怪獣」と独り言を言いながら作っている。りょうたはこ

のところ厚紙を切つてはセロテープで貼り合わせて怪獣を作るのが気に入つていて、毎日のように作つては、どこへ行く時にも手に持つて行くので、保育者が「なくなるといけないからお鞄に入れていらつしやい」と言つても、「なくさないからいい」と一刻も手から離さず、お弁当の時も前に置き、降園時になるとようやく鞄に入れて「せんせい、怪獣おうちへ持つてく」と嬉しそうに降園する程の思い入れであった。今日は厚紙ではなく乳酸飲料の容器である。「りょうちゃん、今日の怪獣は〇〇の容器なの?」「うん、強いのね」「そうか、きつと強いのが出来るんだ。出来たら先生にも見せてね。ご用があつたら言つてね」と声を掛け、次々に登園する子どもたちを迎えるのに追われた。

そうこうしているうちに、「せんせい、おつはあ」と元氣一杯で挨拶しながらこうきが登園してきた。たかゆき、たつまの飛行機作りに目を止め、「なにやつとる?」と近づいて声をかけた。たかゆきもこうきの

登園に気がついていて「こうきも仲間になる？」と即応して誘うが、こうきが黙っているので、「オレ0号！ こうき1号になってもいいよ」と再びこうきを誘っている。何事にも一番でないと気に入らないこうきが、たかゆきの誘いをどう受け入れるのか気になって見ていると、「オレ、合体出来る飛行機にしよう」と言いながら、黙々と飛行機を作っているたつまを覗き、材料箱から牛乳パックを出して作り始めた。

怪獣作りのりょうたは、「せんせい、僕の怪獣」と出来上がった怪獣を見せ、出発台の隅に置き、何故か発砲スチロールの箱を怪獣にかぶせて腰を下ろし、三人の飛行機の出来上がるのを待っている様子。その時、部屋の鳩時計が九時を指し、鳩が出て鳴いた。すぐにたかゆきが気がついて鳩時計を眺めていたが、終わると「いま九時ら」たつま、こうき、りょうたに向かつてふざけた調子で歌いだす、と三人も面白がって「いま九時ら」と声を揃え、三人が何回も繰り返しながら飛行機を作っている。りょうたも嬉しそう！ お

互いに共鳴し合つてとにかく楽しい！ そんな姿が伝わって、四人が一緒に何かをしようとしていることに互いの気持ちの確認をし合っているのかな、と保育者は思い、見守る。

たつまが「できた！ せんせい、オレの鉄砲が出るよ」と保育者に見せにきた。見ると飛行機の胴体の下に開けた穴から、厚紙を円筒形にして巻いたものが顔を出している。

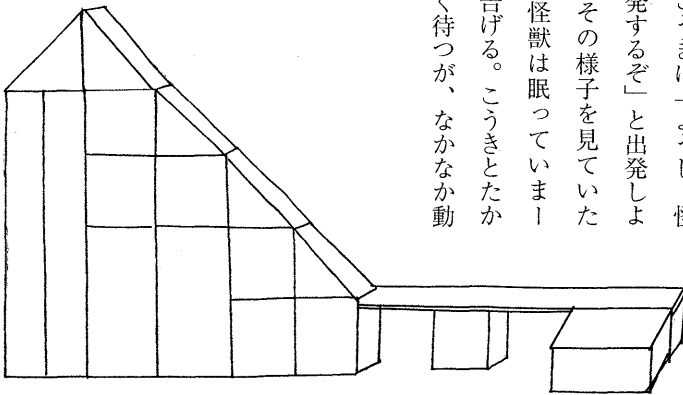
「ほんとだー、すごい、いい考えね」と感心すると、「オレのは火と鉄砲が出る」とこうきも得意げに見せてくれる。「こうちゃんのもスゴイ！ よく考えたね」と認めながら「りょうちゃんが出発台で待つてるよ」と怪獣ができていることを知らせる。するとたつまが思い付いたように「基地を作らんといかん。基地からダダダーンと攻撃するんだもん」という。それを聞いたたかゆきとこうきは「そうか、そのことは分からなかった」と言いながら、急ぎ、三人で基地はどんな風にするか、怪獣はどこから現れるのかと。これにつ

いてはこうきが「ダイナの怪獣は雪から現れるだよ」というが、たつまは「土の中から現れるだよ」と言い、話が弾む。どちらとも決まらないまま基地作りが始まった。最初に作った出発台の足の部分を高くしようとするが、たつまのイメージに合わず、何度も積み木を積み直し、最終的には下の図3のような形におさまった。

基地から牛乳パック飛行機出発

三人はどうやって怪獣と戦うか、お互い自分の飛行機を持って話し合っているようだったが、戦略が決まったらしく、基地を挟んで三人は離れた位置に構える。が、たつまがどうも基地が気になるらしく、再び積み木を運んで基地を作る、そこへりょうへい、ゆうすけが登園して基地を見に来る。二人はすぐに「仲間に入れて」とたつまの基地作りに参加するが、「飛行機がある」とりょうへい、ゆうすけは飛行機作りに造形コーナーへ。こうきが「たつま、怪獣現れたか」と

たつまに向かって発信すると、たつまは「まだ現れていない」と応答しながら基地の回りを積み木でさらに固めている。こうきは「ようし、怪獣を探しに出発するぞ」と出発しようとする、その様子を見ていたりょうへいが「怪獣は眠っていません」と大声で告げる。こうきとたかゆきはしばらく待つが、なかなか動



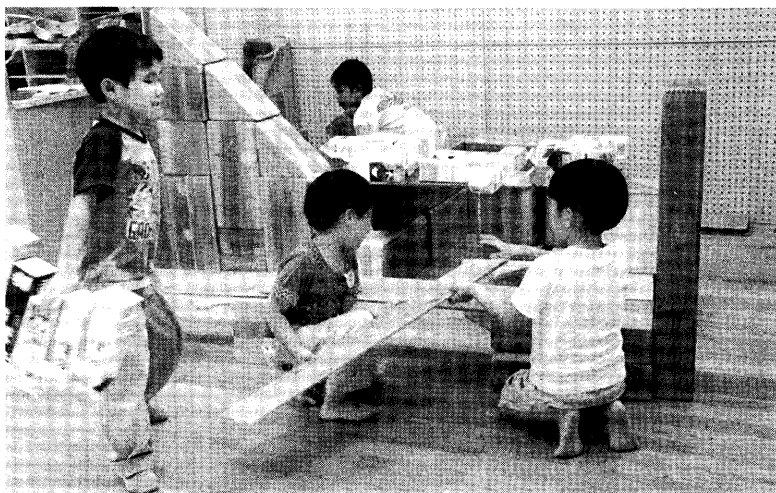
▲図3

きださない。たかゆきは「まだ出てこーん」と怪獣の出番を催促するが、りょうたは「まだ眠っています」と繰り返す。たかゆきは怪獣の上にかぶせてある発砲スチロールの箱を見て「雪に埋められとるのか？」とりょうたに言う。どうなることかと眺めていると、りょうたは「分かった！」と発砲スチロールをかぶせたまま怪獣を持ってデッキへ出て、お日様に当てて暖めているつもり。もう待ちきれなくなったこうきが大声で「残り三十四秒」と叫んだので、ようやくりょうたは「強いぞー がおー！ がおー！」と怪獣を持って基地に近付いてくる。こうきはただちに飛行機を出発させ、「ダダダダーン」と戦う真似をする。りょうたも「がおーがおー」と叫びながら応じる。たかゆきも続いて飛行機を出発させ、「ダダダダーン」と攻撃する真似をするが、勢いあまって怪獣を持ったりょうたにぶつかり、その拍子に飛行機が壊れてしまった。「いて、りょうたの怪獣強い！」と言いながら、こうきとたつまに「抜けてもいいか」と聞いて造形コー

ナーへ修理に行く。たかゆきの修理を待っているのか、たつまはさらに積み木を運び、基地を広げている。こうきも積み木を運びだし、みんなの部屋を作る。たつまの積み木につなげ始め、トンネルのような家が出来た。

再び怪獣と戦う

その一つ一つに飛行機をスタンバイさせ、こうきとたかゆきが「10、9、8、7、6、5、4、3、2、1」とカウントダウンするが、二人の出発が合わず、二回目で同時に出発し、りょうたを飛行機を持って追いかける。りょうたが逃げる。たかゆきが「まてー」と追いかけるがうまく攻撃できず、こうきと飛行機を合体させて大きくしようと考え、造形コーナーへ行くがなかなかうまく行かない。そこへようやくりょうたが作ったばかりの飛行機を持ってりょうたを追いかける。りょうたがつまずいて転ぶ。りょうたは「そっちは三人でずるいじゃないか、もうやめる！」と怒



▲基地づくり

り、さっさとデッキへ出て休憩に入ってしまった。

怪物がいなくなった四人は戦いの目標を失い、しばらく飛行機を持って保育室を走り回っていたが、園庭へ牛乳パック飛行機を飛ばしに出て行った。途中から参加したりようへいもよく分らないうちに戦いは終わり、再び造形コーナーへと戻って、また飛行機を作り始めた。時計は九時四十分を指し、始めて六十分余りを経過していた。

この遊びから得たもの

この遊びの始まりは、たつまが牛乳パック飛行機を飛ばして遊ぼうと考えたところから、仲良しのたかゆきに出発台を作ろうと誘いをかけ、たかゆきも賛成し、出発台作りが始まった。

りょうたは登園しているが、どちらかといえば日常一人で自分の欲しいものをコツコツと作って楽しむというところが大きく、今朝も造形コーナーで何を作ろうかと考えていた時（と思われる）、たつまとたかゆ

きがきて新型飛行機作りが始まった。それを見て「ほくは怪獣」と怪獣を作ろうと決めたのではないか。

……その時戦うことをイメージしていたか否かは分からない……。りょうたの怪獣が出来上がった出発台におかれたことや、保育者が怪獣との戦いをイメージしたような「りょうちゃんが出発台で待つてるよ」と声を掛けたことなどが、初めの出発台を作って飛ばそうという目的から、「基地を作らんといかん、ダダダダン……」と「怪獣と戦う」ことを思い付いたのではないか。遊びの出発点でのイメージがそれ程強いものではなかったのか、遊びの過程で回りの状況や言葉を受けて変化していき、遊びの内容が膨らんだと思われる。

遊び、「怪獣と戦おう」は、保育者から見れば偶然、突然出てきたように思ったが、子ども同士の中では、すでに園庭やリズム室などでは楽しまれていた遊びだったかもしれない。牛乳パック飛行機作りは以前から目にしてしたが、保育者の頭には、ただ牛乳パッ

クをセロテープで貼り合わせているが、どこが気に入っているのかな、位にしか受け止めていなかった。ましてやこのように大きなものを持ち、高く掲げながらゴーツと部屋や廊下、園庭を駆け回るスピード競争など思ってもみなかった。

年中児の後半に始まったと思われる牛乳パックを貼り合わせた飛行機作りが、次第により飛行機らしくなってきたと考えると、出発台を作る↓出発して飛ばせるところへ膨らんで遊びの内容が大まかではあるが豊かであったこと、友だち同志互いのやり取りの中で、それぞれが自分の気持ち、考えを自在に発信し、受け取って遊びを進めていったこと、自分のイメージしたものを作る、作ったもので遊ぶ、もあったことは、これからの保育のうちの一つのベースとして、遊びのきっかけ、子どもにとっての新鮮さなどを何時、どのように仕掛けていくか楽しみとなった。

(愛知豊川双葉幼稚園)